東本願寺〔東六条にあり〕近年天明の末、回禄神の災に罹しより、直に河州八尾の御堂を引移して仮本堂とし、諸国より数千の門徒競来りて、釿初より大木大石数百を寄附し、粉骨砕身して出精怠らず、多の年を累ず、本堂、阿弥陀堂、菊の門、南の門、玄関、鐘楼、鼓楼、大寝殿、小寝殿、白書院、黒書院、鷺の間、奥の殿舎の数々、庫蔵、台所、茶所に至る迄、厳重壮麗として成就し、今年弥生廿八日本堂開山尊影の遷座、卯月二日には阿弥陀堂の遷仏あり。これを拝せんとて関東関西及び島々よりも波涛を凌ぎ、稲麻の如く参詣の門徒境内の家々に充満せり。実に開山親鸞聖人、末代の機法を鑑て道俗男女を安く善所に至らしめん宗風弘め置給ひしこそ、有難も又とうとけれ。

〔此館舎の中に、大寝殿小寝殿の名目あり、これを按ずるに、むかし此地は祭主三位輔親卿の殿舎なり、其林泉に丹後の海橋立を移して、池を広く掘りて松を樹、風景うるはしく月を賞ぜられしなり、此事清輔の袋草紙に見へて、寝殿の名目あり。後世当寺の殿舎を建られし時、此旧跡なる事を知ってかく名づけられし物ならん。輔親卿は歌人にて新古今集に撰れ和歌入りし人なり〕

袋草紙云　南院は海橋立なり、輔親卿の家なり、為レ見レ月寝殿南庇不レ差云々。懐円ガ池水ハアマノ河ニヤカヨフラントヨム、此所ニテノ詠也。月明夜ニテ行向ヘルニ、夜更テ人モネヌラント思フニ、寝殿ノ南面ニ輔親一人月ヲ見テ居テ、于レ時相互ニ乗レ興詠二此歌一、暁更帰ルト云々。